姫路城城下町跡

―姫路城跡第444次発掘調査報告書―

2022

姫路市教育委員会

序文

姫路市の中心部に位置する姫路城は、関ヶ原合戦の功により播磨52万石の大名になった池田輝政が慶長6年（1601）から同14年（1609）にかけて築城した平山城で、白鷺城とも呼ばれています。標高45.5mの姫山に配置された本丸を中心に、周辺の武家屋敷や町屋などを含めて城下町全体が内堀・中堀・外堀の三重の堀で囲まれていました。このたび、発掘調査を行った呉服町は、外堀と中堀の間に挟まれた外曲輪に位置し、町人町として栄えました。町名の由来は、呉服屋があったからとされます。

姫路市の中心部は昭和20年（1945）の米軍による空襲により大きな被害を受けましたが、戦後の土地区画整理等に伴い市街地も復興していきました。近年、発掘調査の進展により城下町の遺構が地中に良好な状態で残存していることが明らかになりつつあります。今回の調査地は町屋に該当し、江戸時代前期に鉄製品の生産または加工が行われていた可能性のある遺構及び遺物が見つかるなど、地域の成り立ちや歴史的な変遷を解明する上で貴重な資料が得られました。ここにその成果を報告し、今後の調査・研究の進展に資するものです。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました事業者様をはじめ関係の方々に心より御礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月

姫路市教育委員会

教育長　西田　耕太郎

例　言・凡　例

1. 本書は、姫路市呉服町 17 番において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社立建コーポレーションから委託を受け姫路市教育委員会が実施した。現地調査及び報告書の執筆・編集は姫路市埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。
3. 発掘調査に関する写真・図面等の記録及び出土品は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
4. 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系Ⅴ系であり、方位は座標北を示す。標高値は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
5. 土層図の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』に準拠した。
6. 遺構記号は、文化庁文化財部記念物課発行『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』（2010）に依拠した。

目　次

第 1 章　経過…… 1
第 2 章　調査の概要…… 1
第 3 章　遺構・遺物…… 2
第 4 章　総括…… 3
報告書抄録

表目次

表 1　出土遺物観察表 …… 4
表 2　その他遺構一覧表（1）…… 5
表 3　その他遺構一覧表（2）…… 6
表 4　その他遺構一覧表（3）…… 7

図目次

図1　調査区割図 …… 1
図2　周辺の遺跡 …… 8
図3　調査位置図 …… 8
図4　調査区配置図 …… 8
図5　調査区全体図 …… 9
図6　調査区断面図 …… 10
図7　調査区北半平面図、屋敷境石列 1・2断面図… 11
図8　石列・礎石断面図・立面図 …… 11
図9　SK08平・断面図 …… 12
図10　SK22-1・SK22-2・SK22-3・SK22-4・SK22-5・SK23 平面図 …… 12
図11　SK22-1・SK22-2・SK22-3 断面図 …… 12
図12　SK22-4 断面図 …… 12
図13　SK22-5 断面図 …… 12
図14　SK23 断面図 …… 12
図15　SK08 出土遺物 …… 12
図16　SK22-1・SK22-3・SK22-4・SK22-5・SK23 出土遺物…… 13
図17　SK48・SK63 平・断面図 …… 14
図18　SK170 平・断面図…… 14
図19　SK230 平・断面図…… 14
図20　SK43・SK48・SK63 出土遺物 …… 14
図21　SK121・SK126-3・SK147-2（1）出土遺物…… 15
図22　SK147-2（2）出土遺物…… 16
図23　出土銭貨…… 16
図24　SK17・SK18 出土土人形 …… 16
図25　SK22-5 出土獣骨 …… 16

写真図版目次

写真図版 1　遺構写真（1）
写真図版 2　遺構写真（2）
写真図版 3　遺構写真（3）

第1章　経過

姫路市呉服町17番において住宅の建築工事が計画された（図2）。計画地が姫路城城下町跡（県遺跡番号020169）に該当することから、文化財保護法第93条の規定に基づき事業者から令和2年8月5日付で埋蔵文化財発掘届出書が提出された。姫路市教育委員会では9月5日に遺跡の保存状況を把握するための確認調査（姫路城跡第441次調査　調査番号：20200251）を実施した結果、遺構及び遺物を検出した。これを受けて事業者と協議を行い、工事により遺構の破壊を免れることができない312㎡を対象に本発掘調査（姫路城跡第444次調査　調査番号：20200454）を実施することになった。令和2年11月16日付で事業者と協定を締結し発掘調査を開始した。現地調査は令和3年1月7日から3月18日まで行った。現地調査終了後、整理作業及び報告書の作成を行い、本書の刊行をもって事業を完了した。本発掘調査の開始から報告書の刊行までの体制は以下のとおりである。

姫路市教育委員会
教育長　西田耕太郎（令和3年4月1日～）
　　松田克彦　（～令和3年3月31日）
教育次長　峯野仁志　（令和3年4月1日～）
　　岡本　裕　（～令和3年3月31日）
生涯学習部
部　長　福永安洋

文化財課
課　長　福永安洋（生涯学習部長兼務
　　令和3年7月1日～）
　　村田　泉（令和3年4月1日～6月30日）
　　大谷鯱彦（令和2年4月1日
　　～令和3年3月31日）
技術主任　中川　猛（令和3年4月1日～）
同　　関　　梓

埋蔵文化財センター
館　長　大谷鯱彦（令和3年4月1日～）
　　（7月1日～文化財課主幹を兼務）
　　松本　智（～令和3年3月31日）
課長補佐　岡崎政俊
　　森　恒裕
　　多田鞆久（令和3年4月1日～）
技術主任　南　憲和

なお、発掘調査の実施にあたっては、有限会社松浦興業　鳴海　賛美の支援を得た。

第2章　調査の概要

調査地は姫路城外曲輪の南部に位置する「東呉服町」と呼ばれた町人町にあたり、東西に延びる街路を挟んで長方形街区が形成されていた（図3・4）。町名の由来は呉服屋があったためとされる。文献史料によると元和5年（1619）の家屋敷売券状（前川家蔵那波文書）に「東御ふく町」とあり、17世紀初頭から町屋が形成されていたとみられる（註1）。紙屋が多くなったのか、慶安2年（1649）から寛文7年（1667）頃の間に描かれた「姫路御城廻侍屋鋪新絵図」（註2）には「東紙屋町」とあるが、その後は「東こふく町」に戻っており、近代に至っても東呉服町として継続した。

大正14年（1925）の地図によると、調査地の区画は間口約21.4m、奥行き約31.8m、面積約681㎡を測り、東呉服町の南側街区では間口・面積ともに最大規模であった。街区の形状は大きく変わることはなく現代まで引き継がれている。今回は区画内の約46%を調査したことになり、調査区の西辺及び南辺はその境界付近に位置する。

調査は発生土の仮置場を確保するため、便宜的に東区・南西区・西区に分割して順に進めた（図1）。現代の盛土・攪乱等を機械で除去した後、遺構を人力で発掘し、記録保存のための写真撮影及び実測による平・断面図等の作成を適宜行った。

図1　調査区割図

調査地の現況地盤は標高12.3m前後である。層序は現地表から現代の盛土（約20㎝）、昭和20年（1945）の姫路大空襲による戦災焼土層等を経て、標高約11.8mで黄橙色シルト質粘土の安定した地山面に達した（図6）。西区西壁では戦災焼土層の直下（標高12.0m付近）で漆喰層（2～3㎝）の一部が確認されたため、この面が近代の遺構面の一部とみられる。遺構は地山面及びその上位において、近世以降の屋敷境石列2条、石列4条、礎石9個、井戸1基のほか土坑・ピットを多数検出した（図5・写真図版1）。

なお、姫路城城下町跡では通有の城下町建設以前の灰色土層（いわゆる中世耕土）及び中世以前の明確な遺構は検出されなかった。

第3章　遺構・遺物

主要な遺構・遺物のみ記述し、遺物の詳細は表1にまとめた。また、遺物の出土状況・量等からみて、遺構の時期決定が困難なものは表2～4にまとめた。

(1) 屋敷境石列・石列・礎石

屋敷境石列1・2（図7・写真図版2）　現代の敷地境と重複する石列を呼ぶ。調査区の西壁に接して検出した。調査区北西端から南へ7.5mに延びるものを屋敷境石列1、2.5mの間隔を挟んで2.8mにわたって延びるものを屋敷境石列2とした。これらは一連の遺構の可能性もあるが、前者は長辺約20cmの丸味のある石材を主に使用しているのに対し、後者は径15cm大の小振りの円礫が主体であった。天端のレベルも前者が12.0mで概ね一致するのに対し、後者は11.9m前後でばらつきがあった。どちらも現代の盛土で覆土されていた。

石列1（図7・写真図版2）　北東部で検出した。南北方向に長径40cm大の丸味のある石材が向きを揃えて5石（1.7m）連続し、天端は約11.8mで一致する。詳しい時期は不明である。

石列2（図7・8・写真図版1・2）　中央部で検出した。長径30cm大の石を主体とする中に長径60cmのものが1石配置される。抜き痕を含めると南北3.8mを測る。天端はほぼ11.8mで揃うため、構造物の礎石も可能性がある。後述する遺構（SK50・SK153・SK184）の時期からみて、17世紀末以前には遡らないと考えられる。

石列3（図7・写真図版1・2）　中央部東寄りで検出した。東西方向に長径30～40cm大の丸味を持つ石が平滑面を上に向け7石（1.4m）並ぶ。大振りの石の天端は約11.95mを測る。詳しい時期は不明である。下位のSK71・SK75には同程度の礎石状の石が数石含まれるが、SK71の第1層及びSK75の上層にまとまっており、石列3の根固めとして集められた可能性がある。

石列4（図7・8・写真図版2）　中央部で検出した。東西方向に径20cm大の円礫が0.7m連続する。天端は11.7～11.8mを測る。時期は不明である。

礎石1～9（図7・8・写真図版1・2）　中央部で検出した。石の上面が平滑で天端が11.8～11.9m前後で概ね揃うため、礎石と判断した。長径30～60cmを測り、複数で構成されるもの（礎石1～7）と単独のもの（礎石8・9）がある。礎石8は断面図を作成していないが、上下2段になり、礎石3もその可能性がある。礎石1～6は配置からみて、東西約2.6m、南北約3.9m規模の建物又はそれ以上の規模の建物の一部と推定される。SK05・SK06は礎石4の据え付け掘方であろう。

(2) 井戸

SE111（図7・写真図版3）東部で検出した。近代以降の井戸に切られるが、調査区内ではこれ以外に明確な井戸は見つかっていない。石組井戸で、井戸側の径0.8m、掘方の径1.6m、深さ2.5m（以下、深さは検出面からの深さとする。）を測る。最下層から15～16世紀頃と思われる青花碗、備前焼甕、丸瓦が出土したが、小片・少量のため時期の特定に至らなかった。

(3) 土坑

SK08（図9・15・写真図版3）　北東部で検出した。径0.8m、深さ0.15mを測る。検出面付近から土師器把手付皿（図14-1。以下、遺物は通し番号のみ記載）、上層から染付碗（2）・鉢（3）が出土した。

SK22-1・SK22-3・SK22-4・SK22-5（図10～13・写真図版3）　礎石2・礎石3の下位で検出した。切合いから枝番の1→3→2、3→4→5の順に新しくなるが、2と4・5の先後関係は不明である。SK22-2を除き埋土に焼土・炭化物が層状に含まれる。遺物はSK22-1から土師器皿（4）、SK22-3から瀬戸美濃焼志野菊皿（5）・天目碗（6）、白磁皿（7）、備前焼甕（8）・擂鉢（9）、SK22-4から瀬戸美濃焼志野向付（10）、平瓦（11）、SK22-5の1層から糸切り底の土師器皿（12）、鞴の羽口（13・14）、3・4層から軟質施釉陶器碗（15）、絵唐津の鉢（16）、砂目の肥前系施釉陶器皿（17）、白磁皿（18）、青花碗（19・20）、産地不明陶器擂鉢（21）、備前焼盤（22・23）、炮烙（24）、鞴の羽口（25・26）、イノシシの右下顎骨・橈骨・脛骨とみられる獣骨（図25）が出土した。SK22-5からはこのほか、食料残滓とみられる貝殻と鉄滓が合計約8kg出土した。鞴の羽口（13・14・25・26）の径はいずれも概ね3

cmを測り、同一規格とみられる。遺物は上下層で顕著な時期差は認められず、17世紀前半から中頃の範疇で収まる。

SK23（図10・14・16） 礎石3の下位で検出した。南北1.1m、幅0.6mの楕円形を呈し、深さは0.28mを測る。上層から輪の羽口（27）、鉄滓が合計約2kg出土した。先述のSK22-4・SK22-5を含めて鉄製品の生産・加工に伴う廃棄土坑と考えられる。

SK43（図7・20） 礎石8の下位で検出した。てづくねの土師器皿（28）、外面に漆が付着した同壺（29）、肥前系施釉陶器碗（30）、青花碗（31）など17世紀代の遺物が出土した。

SK48（図17・20） 石列3の下位で検出した。南北2.5m以上、東西0.55m、深さ0.16mを測る溝状の土坑である。17世紀代の青磁碗（32）、炮烙（33）のほか貝殻が多く出土した。

SK50・SK184（図7・写真図版2） 石列2に先出する。SK50から備前焼擂鉢、中国製青磁、土師器皿、青花碗、SK184から胎土目の唐津焼が少量出土した。いずれも図化に耐えなかったが、17世紀末以降に下るものではない。

SK63（図17・20） 中央部で検出した。南北2.3m、東西1.0m、深さ0.2mを測る。糸切り底の土師器皿（34）、柿釉を施した灯明皿（35）、施釉陶器灯明具（36）、染付碗（37）、施釉陶器甕（38）など19世紀代のものを含む遺物が出土した。

SK121（図5・21） 南西部で検出した。径1.7m、深さ0.5mの円形の土坑である。染付広東碗（39）、左巻き巴文の軒丸瓦（40）のほか貝殻が出土した。39は18世紀後葉から19世紀代のものである。

SK126-3（図5・21・写真図版3） 南西部で検出した。北側は調査区外に続くが、径2.0m、深さ1.2mを測る。染付広東碗（41）、関西系焼締陶器擂鉢（42）、中心飾りが五葉の軒平瓦（43）が出土した。41は18世紀後葉から19世紀代のものである。

SK131（図5・写真図版2） 屋敷境石列1の下位で検出した。図化に堪えなかったが、17世紀前半頃の肥前系施釉陶器や炮烙の細片が少量出土した。

SK147-2（図5・21・22・写真図版3） 南西部で検出した。長径1.5mの楕円形を呈す。深さは0.5mで、底付近から陶磁器類がまとまって出土した。遺物は不明土製品（44）、施釉陶器尿瓶（45）、染付蓋（46）・碗（47）・広東碗（48・49）・筒形碗（50）、軒桟瓦（51）がある。47は幕末頃のもので、内面に赤色顔料が付着していた。

SK170（図18・写真図版2） 石列2の西側で検出した施釉陶器の埋甕で、底径19.5cm、残器高26.1cmを測る。底部に焼成後の穿孔が認められる。江戸時代中期から後期のものである。

SK230（図19・写真図版2） 屋敷境石列1の東側で検出した小型の水琴窟である。丹波系甕が使用されていた。甕は口径23.1cm、器高25.4cmを測る。19世紀以降のものである。

上記のほか**SK24・SK27・SK82**からは銭貨が出土した（図23・写真図版3）。52・54は寛永通寶、53は篆書の天聖元寶である。**SK17・SK18**の検出中に土人形（55）が出土した（図24）。

第4章　総括

調査地は姫路城外曲輪の南部に位置する東呉服町と呼ばれた町人町にあたり、17世紀中葉頃には一時的に東紙屋町と呼ばれたことが判っている。調査の結果、17世紀前半から中頃に鉄製品の生産・加工が行われていたとみられる土坑群（SK22-4・SK22-5・SK23）を検出した。その後、前面街路に近い範囲に礎石建物が構築され、屋敷地の南半（裏側）には繰り返し廃棄土坑が掘削される町屋として通有の土地利用形態が幕末まで継続していたと考えられる。江戸時代前期における鉄製品の生産・加工に関連する鍛冶遺構は外曲輪において第437次調査（註3）でも見つかっている。今回の調査成果から17世紀中頃以前とその後で外曲輪の土地利用の様相が変化したと仮定すると、呉服町の場合、町名が一時的に変更になった時期とも合致するため注意される。外曲輪における町屋が17世紀後葉以降に定着した可能性を含めて、今後の調査で明らかにしていきたい。

（註1）姫路市史編集専門委員会（編）1996『姫路市史 第十一巻 上 史料編 近世2』　（註2）姫路市立城郭研究室 2014『姫路城絵図集』
（註3）姫路市教育委員会 2022『姫路城城下町跡－姫路城跡第437次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第117集

（ ）内は復元値，単位はcm.

番号	遺構・層位	種別	器種	口径（長径）	器高	最大径（厚み）	底径（幅）	色調	残存	備考
1	SK08 検出面付近	土師器	把手付鉢	21.7	4.1	28.3	9.5	10YR7/6明黄橙	口1/完形	把手を含めた全長28.3cm
2	SK08 検出面付近	染付	碗	10.2	5.5	10.2	3.9	灰白（釉）	口縁1/2	
3	SK08 上層	染付	鉢	14.6	8.2	15.2	7.6	灰白	口縁1/2	三足付鉢
4	SK22-1	土師器	皿		残1.8			10YR8/2灰白	口縁1/12	
5	SK22-3	施釉陶器	菊皿		残2.7			7.5YR8/1灰白（釉）	破片	瀬戸美濃焼志野
6	SK22-3 中部	施釉陶器	天目碗		残3.3			7.5YR4/3褐	口縁1/8	瀬戸美濃焼
7	SK22-3 下部	白磁	皿	（ 10.6 ）	残3.3	（ 10.6 ）	3.5	灰白（釉）	底部完形	中国製，底部砂付著
8	SK22-3	施釉陶器	甕		残6.7			2.5YR4/2灰赤	口縁1/12	備前焼
9	SK22-3 下部	施釉陶器	擂鉢		残6.7	（ 21.3 ）	（ 11.4 ）	2.5YR6/3にぶい橙	底部1/3	備前焼
10	SK22-4	施釉陶器	向付		残1.5			2.5Y7/1灰白（釉）	底部1/10	瀬戸美濃焼志野
11	SK22-4 礎の下	瓦	平瓦			1.6		5YR/1灰白	破片	
12	SK22-5 1層	土師器	皿	（ 12.0 ）	残2.5	（ 12.0 ）	（ 6.2 ）	2.5YR/2灰白	底部1/3	底部糸切り
13	SK22-5 1層	土製品	輪の羽口	残13.0	残10.0		残9.9	5YR6/6橙		
14	SK22-5 1層	土製品	輪の羽口	残15.1	残9.4		残10.0	5YR6/6橙		
15	SK22-5 3・4層	施釉陶器	碗	（ 11.9 ）	残6.3	（ 11.9 ）	（ 5.7 ）	2.5Y7/3夜黄（釉）	底部1/3	軟質施釉陶器
16	SK22-5 3・4層	施釉陶器	鉢		残3.6			7.5Y7/1灰白	口縁1/10	肥前系，絵唐津
17	SK22-5 3・4層	施釉陶器	皿		残3.2	（ 13.9 ）	5.4	7.5Y7/2灰白（釉）	底部1/2	肥前系，砂目
18	SK22-5 3・4層	白磁	皿		残1.1	（ 7.3 ）	（ 5.5 ）	灰白（釉）	底部1/7	中国製
19	SK22-5 3・4層	青花	碗	（ 7.8 ）	残3.3			明緑灰（釉）	体部1/4	
20	SK22-5 3・4層	青花	碗	（ 12.3 ）	残5.6	（ 12.3 ）	5.5	明緑灰（釉）	底部完形	
21	SK22-5 3・4層	施釉陶器	擂鉢		残3.8			5YR3/3暗赤褐	口縁1/10	産地不明
22	SK22-5 3・4層	施釉陶器	盤	（ 50.0 ）	残7.8	（ 50.0 ）	（ 27.3 ）	2.5YR4/2灰赤	口縁1/4	備前焼
23	SK22-5 3・4層	施釉陶器	盤	（ 30.6 ）	残4.3	（ 31.7 ）	（ 26.2 ）	5YR4/2灰褐	口縁1/8	備前焼
24	SK22-5 3・4層	土師質	鉢蓋	（ 23.0 ）	残6.4	（ 24.0 ）	（ 23.5 ）	7.5YR6/6橙	口縁1/7	
25	SK22-5 3・4層	土製品	輪の羽口	残11.2	残6.3		残9.4	7.5YR7/6橙		
26	SK22-5 3・4層	土製品	輪の羽口	残12.0	残9.7		残10.0	7.5YR7/4にぶい橙		
27	SK23 上層	土製品	輪の羽口	残9.9	残8.2		残8.0	7.5YR7/6橙		
28	SK43	土師器	皿	（ 10.9 ）	1.9	（ 10.9 ）	（ 4.6 ）	2.5YR/3夜黄	口縁1/4	てづくね，灯明皿
29	SK43	土師器	壺		残5.8	（ 10.8 ）	（ 7.2 ）	2.5YR5/6明赤褐	底部完形	外面に漆付着
30	SK43	施釉陶器	碗	（ 12.4 ）	残6.2	（ 12.8 ）	（ 5.2 ）	10Y6/1灰（釉）	底部1/2	肥前系
31	SK43	青花	碗		残4.5			灰白（釉）	口縁1/10	
32	SK48	青磁	碗		残7.1	（ 10.8 ）	（ 4.5 ）	明緑灰（釉）	底部3/10	高台に砂付著
33	SK48	土師質	鉢蓋	（ 27.8 ）	残7.8	（ 29.0 ）	（ 26.4 ）	5YR5/6明褐橙	底部2/5	
34	SK63	土師器	皿	（ 7.4 ）	残1.6	（ 7.4 ）	5.0	10YR7/3にぶい黄橙	底部7/8	底部糸切り
35	SK63	土師器	皿	11.3	2.3	11.3	4.3	5YR6/8橙（釉）	口1/完形	柿釉，灯明皿
36	SK63 島上層（礎層）	施釉陶器	灯明具		残1.7	（ 9.0 ）	（ 4.2 ）	5Y6/2灰オリーブ（釉）	底部1/2	
37	SK63	染付	碗	（ 9.6 ）	残5.6	（ 9.6 ）	（ 3.7 ）	灰白（釉）	口縁1/3	
38	SK63 島上層（礎層）	施釉陶器	甕	（ 42.2 ）	残51.3	48.1	19.1	5YR3/4暗赤褐（釉）	底部完形	丹波系
39	SK121 上層が中心	染付	碗	（ 11.4 ）	残6.1	（ 11.4 ）	（ 6.4 ）	7.5GY7/1明緑灰（釉）	高台1/3	広東碗
40	SK121 上層が中心	瓦	軒丸瓦	残7.0	瓦当高13.6	瓦当1.9		N3/暗灰	瓦当1/1	
41	SK126-3	染付	碗		残6.7	（ 12.6 ）	7.8	明青灰（釉）	底部完形	広東碗
42	SK126-3	施釉陶器	擂鉢	（ 30.8 ）	残12.0	（ 31.5 ）	（ 14.0 ）	2.5YR5/6明赤褐	口縁1/4	関西系焼締陶器
43	SK126-3	瓦	軒平瓦	残17.5	瓦当高3.7	瓦当1.4	10.4	N3/暗灰		
44	SK147-2	土製品	不明	4.7	1.9	4.7	3.5	2.5YR/3淡黄	口1/完形	
45	SK147-2	施釉陶器	瓜瓶		13.7	18.9	11.9	5Y6/4オリーブ黄（釉）	口1/完形	
46	SK147-2	染付	香	（ 10.4 ）	3.1	（ 10.4 ）		灰白（釉）	口縁1/2	
47	SK147-2	染付	碗	10.1	5.1	10.1	3.8	灰白（釉）	底部完形	内面に赤色顔料付著
48	SK147-2	染付	碗	11.5	6.1	11.5	6.3	明青灰（釉）	底部完形	広東碗
49	SK147-2	染付	碗	11.1	6.2	11.1	6.2	7.5GY8/1明緑灰（釉）	高台完形	広東碗
50	SK147-2	染付	碗	9.0	8.5	9.2	6.4	明緑灰（釉）	底部完形	俵形碗
51	SK147-2	瓦	軒桟瓦	18.9	9.8		残28.6	N1.5/黒	左巴文，水波文	
52	SK24 底部	銅製品	鈴蓋			厚0.15	2.5			寛永通寶
53	SK27 検出面付近	銅製品	鈴蓋			厚0.1	2.5			天聖元寶
54	SK82 底面付近	銅製品	鈴蓋			厚0.15	2.5			寛永通寶
55	SK17・SK18	土製品	土人形	残3.7		（ 1.9 ）	残2.1	10YR6/3にぶい黄橙	胴部から下	

表1　出土遺物観察表

遺構種別	遺構番号	長軸（辺）（直径）	短軸（辺）	深さ	形状	切り合い関係	埋土（断面）等の所見	主な出土遺物
SK	1	400	110	50	隅丸長方形		断面形状は台形状。埋土は締りが強く，均一，底面に凹凸。	埋土位から土師器，瓦の小片
SK	2	130	121	25	不整円形		断面はレンズ状。埋土は総じて締りが強い砂質シルト，大きく上層，下層に区分。検出時は礫が数個あるだけと認識していたが，完掘時では周囲をほぼ一周する形で並べられており，その中心部にはやや大きめの礫がある。柱を根元ていた可能性がある。	無し
SK	3	86(98)	76(86)	47	隅丸方形 四隅に突出部を持つ		断面は三字型から箱型。埋土は締りが強い砂質シルト。単層。遺構の四隅に各四方に突出部には基の直径は小さいが深さのある穴が掘り込まれがある。	染付，関西系陶磁器類碗，貝殻(サザエ)が少量
SK	5	100	82	24	隅丸方形	SK06×	断面形状はレンズ状。締りが強く砂質である。遺構の底上に礫石と思われる礫がある事から，整地土と思われる。	産地不明陶磁器類碗が少量
SK	6	64		21	円形	SK05○	断面形状はレンズ状。締りが強く砂質である。遺構の底上に礫石と思われる礫がある事から，整地土と思われる。	無し
SK	9	93	71	30	長楕円形	SK08×	断面形状は台形状。締りは強い。主体とは同一の可地山ブロックが混じる。	土師器細片
SK	10	64	41	15	楕円形か?	SK09×	断面形状は凸レンズ状。締りは強い。上位には大小の礫・貝類が混入。	無し
SK	12	53	43	28	隅丸方形		断面形状は箱形。締りが強い，単層。	土師器，陶器の極細片
SK	14	130	76	37	隅丸方形	SK15×	断面形状は台形状。締りは強い。上層と下層に区分。	染付，土師器が少量
SK	15	96	61	29	楕円形	SK14×	断面形状はU字状。締りは強い。単層。窓方上印が礫石の下に変ることから，SK14と同様の性格の遺構，又はSK14と同一遺構の可能性がある。	染付細片，貝殻が少量
SK	17	183	120	38	隅丸方形	SK18× SK24○	断面形状は台形状。締りは強い。炭化物が縁石に混じる。埋土は木平堆積の様相を呈する。遺構西隅に礫石が据えられていた。	土師器，染付の細片
SK	18	146	100	54	隅丸方形	SK17○	断面形状は台形状。締りは強い。埋土は水平堆積の様相を呈する。遺構東隅に礫石が据えられていた。	瓶類，染付の細片
SK	19	150	100	340	隅丸方形	SK22-1○	断面形状はU字状。締りは弱い。中位に地山を含む層がある。下位には炭化物が多く層がある。	施釉陶器，軒丸瓦（右巴文），貝殻（サザエ）等が少量
SK	24	57	40	15	隅丸方形	SK17×	他の遺構と比べ非常に浅く，整地土の可能性もある。	寛永通宝（57）は整地の過程で混入したものか。
SK	25	86	67	20	不整隅丸方形	SK38○	断面形状はU字状。締りが強い。上層，中層，下層に区分できる可能性がある。上層は黄褐色，中層はこれに赤黄褐色，下層は黄褐色ブロック混じり。	施釉陶器・皿の小片
SK	26	218	107	41	不整楕円形	SK157○	断面形状は箱状。貝殻の体積を縁に上層，下層に区分できる可能性がある。上層はこれに赤黄褐色，下層は貝殻混じりの層。	備前焼擂鉢，青磁碗等が少量
SK	27	150	124	31	不整台形		断面形状は台形状。締りは強い。地山ブロックが混じる。上位に瓦片・小石が入る。	下層から染付小片，茶書の天型灯(30)（ほぼ銘種不明）の碗底が1点
SK	35	99	83	8	楕円形	SK34-1○ SK36○	断面形状は凸レンズ状。締りが強く瓦片の混入が目立つ。	染付（コンニャク印判?），土師器の細片
SK	36	125	115	16	不整楕円形	SK34-1○ SK35×	断面形状は凸レンズ状。締りは強く地山ブロックの混入が多い。 SK34と同一遺構の可能性も考えられる。	土師器細片
SK	38	269	82	40	不整長方形	SK40○ SK43○	断面形状は凸レンズ状。締りはやや弱い。上位は地山ブロックが多く混入する。	備前焼擂鉢小片
SK	40	115	75	45	不整円形	SK34-2× SK38× SK43×	断面形状は台形状。締りは強い。上位は地山が主体となっている。	染付，土師器の小片
SK	49	136	128	36	不整円形	SK50○ SK63×	断面形状は凸レンズ状。締りは強い。炭入物に弟舞がある可能に分けた。検出面中央付近から数個の礫が固まって出土した。	青花，土師器の小片
SK	50	259	150	28	隅丸方形か?	SK49× SK60× SK184不明	断面形状は台形状。南側が一段落ち込んでいる。締りは強い。 埋土の様相が強い，南側が一段落ち込んでいることから複数の遺構から成るか。	備前焼擂鉢，青磁碗，土師器の細片
SK	52	81	54	28	円形に近い隅丸方形	SK57× SK66×	断面形状は隅丸台形状。締りは強い。地山ブロックと赤黄褐色土の互層，に赤黄褐色土層は間化物の混入も多い。地山ブロック層と赤黄褐色土層の互層。	無し
SK	55	86	78	16	隅丸方形か?	SK56×	断面形状は台形状。一部が段違いのように深くなっている。	検出中に染付，土師器の細片
SK	56	89	77	12	隅丸方形か?	SK55× SK57× SK71×	断面形状は凸レンズ状。締りは強い。	無し
SK	57	223	124	20	隅丸長方形	SK52○ SK56○ SK59○ SK66×	断面形状は台形状である。中央で一段深くなる。締りは強い。上位は地山の混入が多く，下位ではかない。完掘時では遺構中央から東側にかけて一段深くなり，埋土の状況から見ても下位は別遺構の可能性も考えられる。	土師器，染付の細片
SK	59	119	27	26	長方形	SK57○	断面形状は長方形に近い台形状。締りは強い。地山ブロック・炭化物を含む。遺構の南北全体57目および埋丸に切られている。	肥前系施釉陶器細片
SK	60	115		26	不整円形	SK56○ SK61○	断面形状は凸レンズ状。締りは強い。壁面付近は地山が多く混ざる。 遺構中央から南側に瓦片が多く混じる。	染付（コンニャク印判?），施釉陶器，丸瓦の小片
SK	61	119	90	28	不整楕円形	SK60× SK62×	断面形状は切り合い関係から全体形状は不明。締りは強い。被覆体に炭化物が散見される。SK62との境界付近に径cm程の落ち込みがある。	備前焼瓶，瀬戸美濃焼志野，染付の細片
SK	62	80		29	不整円形	SK61○	断面形状は台形状。締りは強い。検出面付近には礫があり，その下に瓦片がある。SK61との境界付近に数cm程の落ち込みがある。	瓶類，施釉陶器，染付（コンニャク印判?），丸瓦が少量

表２　その他遺構一覧（1）

遺構種別	遺構番号	長軸（辺?）（底径）	短軸（辺?）	深さ	形状	切り合い関係	埋土（断面）等の所見	主な出土遺物
SK	64	315	179	35	隅丸長方形	SK48○ SK63× SM69×	断面形状は浅皿状。縞りは強く、上層（暗黒入層）・中層（炭化物混入層）・下層とに区分した。断面観察によると、上層が中層を覆り込む。	染付端反碗、施釉陶器が少量
SK	65	124	86	30	楕円形		断面形状は浅皿状。縞りは強く炭化物・焼土の混入が目立つ。本遺構の下層からはSB65が検出されている。	須恵器細片
SK	66	168		82	不整円形	SK52○ SK57○	断面形状は箱型。下位で炭化物が互層に堆積する。遺構東部は現在により削平されている。	最下層から染付碗、施釉陶器硯毛目筋、土師器が少量
SK	67	190	129	70	隅丸方形	SK68○ SM69○ SK75○	断面形状は深鉢状。縞りはやや弱い。上層・中層・下層に区分した。遺構の南側半分は近年に破壊されている。両隅の遺構とは異なり、瓦片の混入が少ない。下層に炭化物の混入が多い。	施釉陶器、土師器皿、貝殻（サザエ）等が少量
SK	68	336	204	140	隅丸長方形	SK67× SK75○ SE111×	断面形状は台形状。混入物の差異などから6層に区分した。遺構の中位で炭化物と焼土の互層となっている。遺構西側はSB62に切られる。	銭種不明の銅銭が1点
SK	69	228	209	127	不整隅丸方形	SK64○ SM67× SK79×	断面形状は西側が階段状になっている台形状。縞りが悪く水気が多い。瓦・瓦片の混入が非常に多い。SK67・SK68のように分層できず。瓦・瓦片が一度に投り込まれた形跡。	染付碗（くらわんか手）、施釉陶器、土師器皿、関西系焼締陶器擂鉢等の小片
SK	70	145	61	45	隅丸方形か?		断面形状は長方形に近い台形をしている。縞りは中程度。瓦・瓦片の混入がある。地山ブロックが下位に多い。	無し
SK	71	164	85	36	隅丸長方形か?	SK55× SK56○ SK57×	埋土の違いから5層に分けた。1層は石列を構築するために入れられたように見えるが、2層以下は東側から西側に流れるように堆積をしている。	幼児津、丸瓦が少量
SK	72	99	96	27	隅丸長方形	SK83○	断面形状は台形状。縞りは強い。土体とは他遺構に比して硬色。	染付碗（くらわんか手）、施釉陶器、瓶地不明焼締陶器擂鉢が少量
SK	73	64		11	円形		断面形状は凸レンズ状。縞りは強い。土体とは他遺構に比して硬色。	軒丸瓦（左巴文）、土師器、染付の椀細片
SK	75	340	158	31		SK67× SK68×	断面形状は台形状。	須恵器、肥前系施釉陶器、染付細片が少量
SK	79	137	92	26	楕円形	SK69× SM61○	断面形状は台形に近い。上層・中層・下層に区分した。上層は比較的縞りがあったが、中層・下層は縞りが弱い。	須恵器、軒丸瓦（左巴文）、染付（氷裂文）等が少量
SK	80	138	127	65	不整隅丸方形	SK82×	断面形状は台形と思われる。縞り強い。遺構北側に柱痕を持つ。調査区壁面で確認したが、廃方の埋土とは異なり、黄褐色土で柱穴部は暗褐色土である。土師の埋土と柱痕部方にそれぞれ別かない。	無し
SK	81	120	112	29	楕円形	SK79×	断面形状は台形。縞り強い。土体上の部から上層・下層に区分した。上層は径の大きい焼土塊を含み、下層は地山ブロック土体。	須恵器細片
SK	82	140	99	55	不整隅丸方形	SK80○ SK83×	断面形状は深鉢型。縞りは強い。上層は瓦片を多く含む黒褐色土、下層は灰黄褐色土に区分した。上層の黒褐色土は平面では範囲を確認できず、下層の灰黄褐色土を確認したため、2つの遺構をSK82として認識している可能性がある。	施釉陶器縞小片のほか煙水道管 (54)
SK	83	114	100	33	楕円形	SK72× SK82○	断面形状は凸レンズ状。平面、縞り は弱く、全体に部ボボコした土質。遺構の切り合いが微妙で、遺構上端はっきりしない。	施釉陶器、土師器の細片
SK	100	42		30	円形		断面形状はV字状。縞りは強い。	無し
SK	112	242	125	30	隅丸方形	SK124○	断面形状は浅皿状。縞りは強くない。貝類が層全体に混入。全体形状は不明。短軸の数値は残存部分の数値。	染付、施釉陶器、土師器等が少量
SK	136	131	129	49	隅丸方形	SK129○	断面形状は台形状。縞りは強い。最上位は機乱の可能性がある。中位に瓦片、下位に貝類が混入。北西側は調査区外へ続くか。	須恵器、施釉陶器、染付が少量
SK	138-1	184	142	24	円形か?	SK138-2×	断面形状はU字状。縞りは強い。最上位は黒褐色土と地山の互層。中位には礫が混入する。下位は地山直じ中土が水平堆積。検出時ではSK138-2と区別できずに完掘したが、断面を見る限り、別遺構か。	施釉陶器碗、白磁等が少量
SK	138-2	165	67	57	楕円形か?	SK138-1○	断面形状はV字状。縞りは強い。最上位に大きめの礫が並べている。底部からは瓦片が見つかっている。検出時ではSK138-1と区別できずに完掘したが、断面をみる限り別遺構か。	関西系焼締陶器擂鉢、軒丸瓦（左巴文）等が少量
SK	139-2	154	96	45	隅丸長方形	SK138×	断面形状は台形状。縞りはやや弱く、ボソボソしている。	土師器、染付の細片
SK	120	179	131	44	長楕円形	SK116× SK121×	断面形状はU字状。縞りは強い。中位に瓦片・貝類・礫が混入。上位と下位は地山の混入が多い。遺構南西部から一段後くなる。	染付（くらわんか手）、施釉陶器把手付鍋、軒丸瓦（左巴文）等が少量
SK	124	110	73	40	不明	SK112× SK125×	断面形状は不明。縞りは強い。炭化物・焼土粒がボツボツに混入。形状・性格は不明。	須恵器、染付の小片
SK	125	153	51	50	楕円形	SK124○	断面形状は台形状。縞りは強い。上位は褐色土、下位は黒褐色土が主体。瓦片・礫が混入あり。遺構南西は調査区外へと続くか。遺構東部は機乱を受ける。	染付、施釉陶器、須恵器等が少量
SK	126-1	300	250	27	不明	SK118-1○ SK126-2○ SK126-3○	断面形状は浅皿状。縞りはやや弱い。褐全体に礫・瓦片・貝類が入る。地山の崩れと思われる土層とは異なる。下からSK126-2・SK126-3を検出。	土師器、染付が少量
SK	126-2	114	65	37	円形か?	SK126-1× SK126-3×	断面形状は深鉢状。縞りは弱い。下位に陶器・礫の混入が目立つ。遺構東部をSK126-3に切られる。SK126-1・SK126-3に比べ混入物の量は少ない。	施釉陶器把手付鍋・碗・徳利、瓦灯・軒丸瓦（右巴文）の小片
SK	127	110	42	42	楕円形か?	SK137○	断面形状はU字状。土体上に地山が混じる。遺構西部半分は機乱を受ける。	施釉陶器把手付鍋、染付（くらわんか手）の小片、貝殻が少量
SK	128	164	145	208	不整円形		検出面から底面まで全体にたたって礫が詰め込まれていた。遺構北西部及び南東部は機乱を受ける。	無し

表3　その他遺構一覧（2）

遺構種別	遺構番号	長軸（辺）（直径）	短軸（辺）	深さ	形状	切り合い関係	埋土（断面）等の所見	主な出土遺物
SK	129	90	70	40	楕円形	SK168→2○	断面形状はU字状。縁りは強い。埋焼遺構。	施釉陶器優
SK	130	93	64	62	楕円形	SK137○	断面形状はU字状。	須恵、施釉陶器碗、染付碗等が少量
SK	131	190	72	18	長楕円形		断面形状はU字状。縁りは強い。全体に縁がある。	須恵、施釉陶器優、土師器が少量
SK	133	111	103	37	不整隅丸方形		断面形状は台形状。縁りは強い。上位では小縁が多く、中位以下に炭化物・瓦片が混入。	須恵、土師器、染付が少量
SK	137	139	89	58	楕円形	SK127× SK130× SK138○	断面形状は箱型か。縁りは強い。上位では縁が西から東へ流入。中位では柱穴のような形状が見られる。下位は水平堆積に近い。断面観察によりSK138が掘出することを確認した。埋土の堆積状況から、SK137は上位・中位・下位で別遺構の可能性がある。	土師器、肥前系施釉陶器が少量
SK	138	114	76	65	台形	SK137×	断面形状は台形状。縁りは強い。瓦片・縁が多く混入。断面観察により不明瞭ながらもSK137の一部を壊ち込んでいることを確認。埋土の堆積から、SK138は単層のようである。	土師器、染付の縁片
SK	143	134	60	88	隅丸長方形か?	SK168→3○	灰黄褐色土の下層で検出した。断面形状は台形状。上位は縁りは強いが下位は弱い。上位に炭化物・焼土粒が混入。	瓦質土器、須恵、染付が少量
SK	145	269	89	39	隅丸長方形か?	SK168→4×	灰黄褐色土の下層で検出した。断面形状は台形状。縁りは強い。地山ブロックのほか、炭化物・小縁を含んでいる。	無し
SK	149	124	87	19	楕円形	SK160×	断面形状は台形状か。縁りは強い。径が大きい炭化物の混入が目立つ。	須恵器・土師器の縁片
SK	152	120	40	59	円形か?		断面形状はU字状。縁りはやや強い。埋土全体に瓦片等が混入。周辺のSK149・2、SK156・5に似た埋土。	染付、施釉陶器、関西系焼締陶器橋鉢が少量
SK	153-2	65		37	円形		断面形状は台形状。	無し
SK	153-3	37	34	38	円形		断面形状はU字状。	無し
SK	154	64	47	50	楕円形		断面形状はU字状。縁りは強い。上位から下位まで土ぼたに縁が入る。	下層より軒丸瓦（左巻文）の小片
SK	157	151	67	17		SK26×	断面形状は凸レンズ状。縁りは強い。近郊に炭化物含む。	関西系焼締陶器橋鉢、染付、施釉陶器等が少量
SK	159	120	85	16	楕円形		断面形状はU字状。縁りは強い。全体に砂縁が詰まっている。	染付碗が少量
SK	160	185	153	29	隅丸方形	SK149×	断面形状は凸レンズ状。縁りは強い。地山の混入が多い。	染付碗、施釉陶器等が少量
SK	161	219	108	54	楕円形	SK83×	断面形状はU字状。縁りは強い。近郊に岩に瓦片・縁の混入が目立つ。	染付、施釉陶器、土師器が少量
SK	163-2	40		24	円形		断面形状は台形状。縁りは弱くボソボソしている。地山ブロックが斑状に混入。	瓦小片
SK	163-3	134	69	23	楕円形か?	SK181○	断面形状は浅鉢状。縁りは強い。縁の混じりがある。地山の混入はわずか。	施釉陶器大皿小片
SK	168-1	66		18	円形	SK168→2○ SK168→3○ SK168→4○ SK168→5○	断面形状はU字状。縁りは強い。焼土層・炭化物層がある。炭化物・焼土を抜粋して SK168-1とした。	土師器、染付が少量
SK	168-2	100	78	139	円形か?	SK129× SK168→1× SK168→3× SK168→4、 SK168→5との切り合いは不明	断面形状はU字状。縁りはやや弱い。上位の主体土は明るく、下位は暗い。下位では縁の混入が多い。最下層で焼土を検出。	下層から染付、施釉陶器が少量
SK	168-3	98	60	106	円形か?	SK168→1× SK168→2○ SK168→4、 SK168→5との切り合いは不明	断面形状はU字状。縁りはやや弱い。上位の主体土は明るく、下位は暗い。下位では縁の混入が多い。	施釉陶器、染付が少量
SK	168-4	83		52	円形	SK168→1× SK168→5○ SK168→2、 SK168→3との切り合いは不明	断面形状は台形状。縁りは強い。上位は炭化物・焼土が入る。下位は瓦片が入る。	施釉陶器、染付が少量
SK	168-5	47		54	円形か?	SK168→1× SK168→4× SK168→2、 SK168→3との切り合いは不明	断面形状は台形状。縁りは強い。上位は地山の混入が多い。下位は瓦片が混入。	土師器・染付が少量
SK	178	131	30	36	楕円形		断面形状は台形状。縁りはやや弱い。下位に炭化物が層状に堆積。	土師器、被熱した丸瓦の小片
SK	181	144	87	41	楕円形	SK163・3×	断面形状はU字状。縁りは強い。ラミナ状。下位に炭化物・焼土粒が若干混入。	青磁盤、土師器皿、施釉陶器等が少量
SK	184	180	130	40	隅丸長方形	SK185×	断面形状は浅い台形状。縁りは強い。地山ブロック・縁がまばらに混じる。	肥前系施釉陶器皿、産地不明焼締陶器橋鉢等が少量
SK	185	111	101	32	隅丸方形か?	SK184○	断面形状は台形状。縁りは強い。地山・縁の混入がSK184より少ない。	土師器、陶器橋鉢が少量
SK	190	39		50	不整円形	SK184○	断面形状はU字状。縁りは強い。地山ブロックが斑状に混入。	無し
SK	200	65	45	25	楕円形		断面形状はU字状。縁りはやや弱い。地山ブロックが混じる。	無し
SK	216	103	93	40	不整円形		断面形状は深鉢状。縁りは強い。遺構検出面中央には縁の混入がある。下位は地山の混入が多い。	瓦質土器小片
SK	217	57	48	18	不整円形		断面形状は凸レンズ状。縁りは強い。遺石と思われるやや大きめの縁があった。縁の外周と同程度の大きさのピット。	無し
SK	223	52	48	10	楕円形	SK01○	断面形状は浅皿状。縁りは強い。ラミナ状に堆積。SK01の北端を切る。	無し

表 4　その他遺構一覧（3）

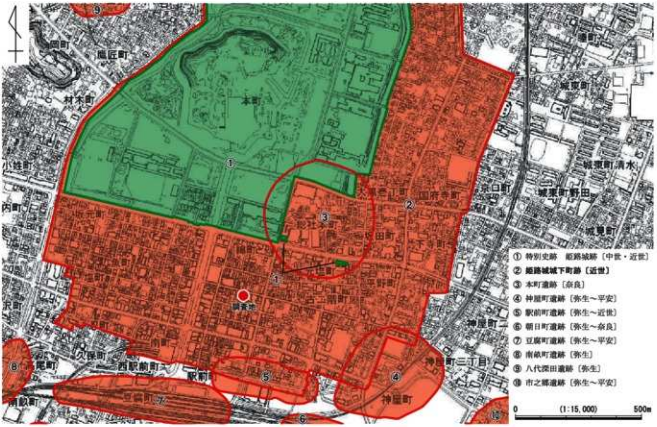


図2　周辺の遺跡

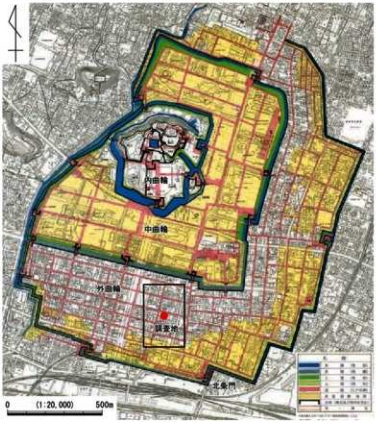


図3　調査位置図

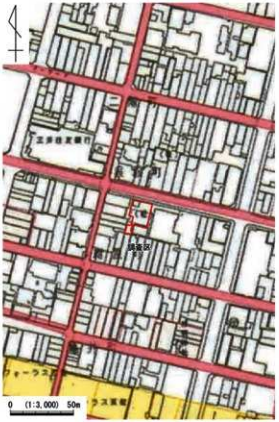


図4　調査区配置図

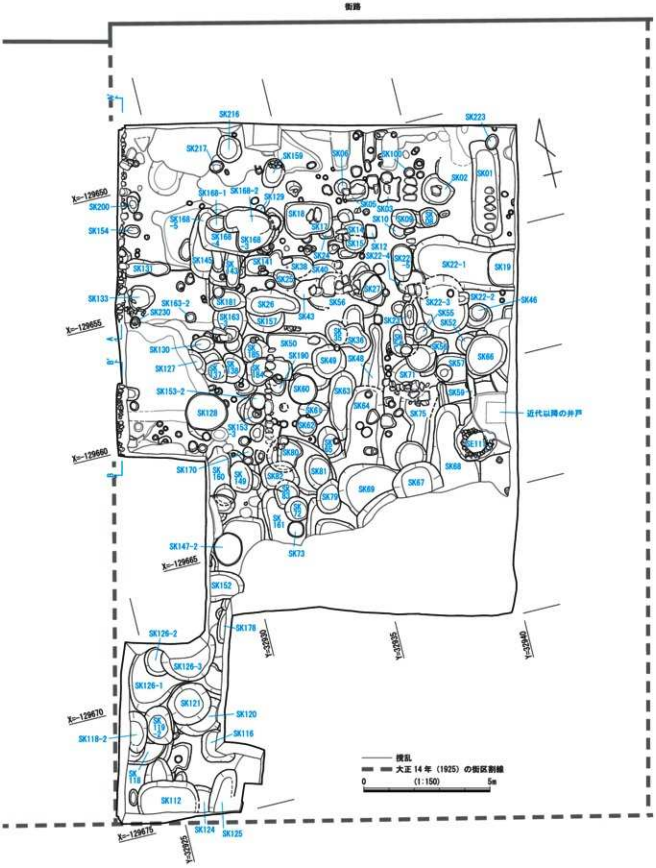
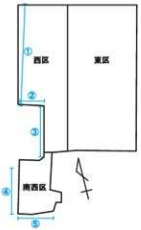
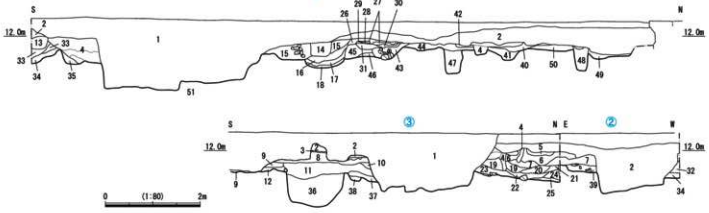


図5　調査区全体図

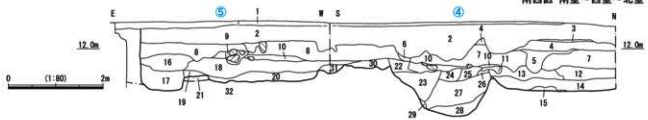


西区 西壁



1. 砂石・礫土
2. 礫土（暗灰褐土層）
3. 溶岩
4. 煙瓦
5. 10YR4/6 褐色土
6. 10YR2/3 黒褐色土
7. 10YR4/4 褐色土
8. 10YR2/3 黒褐色土
9. 10YR4/2 灰黄褐色土　砂石混じり。
10. 10YR2/3 黒褐色土　砂石含む。
11. 10YR3/4 暗褐色土　地山ブロック・礫含む。
12. 10YR4/2 灰黄褐色土　地山ブロック含む。
13. 10YR3/2 黒褐色土
14. 10YR3/3 暗褐色土と10YR4/3 にぶい黄褐色土の混合土　礫、溶岩含む。
15. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
16. 10YR5/3 にぶい黄褐色土　(SK133)
17. 10YR3/2 黒褐色土　砂質、土器・炭化物含む。(SK133)
18. 10YR4/2 灰黄褐色土　砂質　(SK133)
19. 10YR6/2 灰黄褐色土　(SK160)
20. 10YR4/1 褐灰色土　(SK160)
21. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　(SK160)
22. 10YR6/4 褐色土　(SK160)
23. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　(SK160)
24. 10YR5/1 褐灰色土　(SK160)
25. 10YR4/2 灰黄褐色土　炭化物多く含む。(SK160)
26. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
27. 10YR4/1 褐灰色土
28. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
29. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
30. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
31. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
32. 10YR2/1 黒色土
33. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
34. 10YR6/4 褐色土
35. 10YR4/4 褐色土
36. 10YR4/2 灰黄褐色土　瓦片・礫を多量に含む。地山ブロック含 (SK152)
37. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック・炭化物・礫含む。
38. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック・炭化物含む。
39. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　礫が多数混入。
40. 10YR3/2 黒褐色土　地山ブロック多く含む
41. 10YR4/4 褐色土　礫・瓦片含む。(SK200)
42. 10YR3/2 黒褐色土
43. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　砂質　(SK131)
44. 10YR3/3 暗褐色土
45. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物含む。
46. 7.5YR5/1 褐灰色土
47. 10YR4/4 褐色土　粘土質　(SK154)
48. 10YR5/3 にぶい黄褐色土
49. 10YR4/2 灰黄褐色土　地山ブロック含む。
50. 10YR4/2 灰黄褐色土
51. 10YR7/8 黄橙色シルト質粘土　（地山）

南西区 南壁～西壁～北壁



1. コンクリート
2. 砂石と礫土の混合土　瓦片・煙瓦が混入。
3. 礫土（暗灰褐土層）
4. 10YR7/4 にぶい黄橙色土　粘性強い。
5. 10YR3/2 黒褐色土　地山ブロック含む。
6. 5YR4/4 にぶい赤褐色土　締り強い。礫土混入。
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック多く含む。礫の混入あり。
8. 10YR2/3 黒褐色土　締り強い。地山ブロック含む。炭化物含む。
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　締り強い。
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック・礫含む。
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　瓦片・礫混入多い。
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　瓦・礫・見返入多量。(SK126-1)
15. 10YR6/4 にぶい黄褐色土
16. 10YR3/3 暗褐色土　締り強い。礫・瓦片混入。(SK125)
17. 10YR2/2 黒褐色土　締り強い。礫・瓦片混入。(SK125)
18. 10YR4/2 灰黄褐色土　地山ブロック含む。炭化物含む。
19. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　(SK124)
20. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　締り強い。地山ブロック含む。貝殻・瓦片混入 (SK112)
21. 10YR4/3 にぶい黄褐色土と10YR6/4 にぶい黄橙色土の混合土
22. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　締り強い。
23. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　締り強い。地山ブロック・礫混入。(SK118-2)
24. 10YR6/4 にぶい黄橙色土　瓦・礫含む。(SK118-1)
25. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。(SK118-1)
26. 10YR3/4 暗褐色土　締り強い。(SK118-1)
27. 10YR3/2 黒褐色土　礫・瓦片混入。(SK118-1)
28. 10YR3/2 黒褐色土　礫・瓦片混入。(SK118-1)
29. 10YR3/2 黒褐色土　礫混入。(SK118-1)
30. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。
31. 10YR4/2 灰黄褐色土　地山ブロック含む。
32. 砂礫（地山）

図9 調査区 断面図

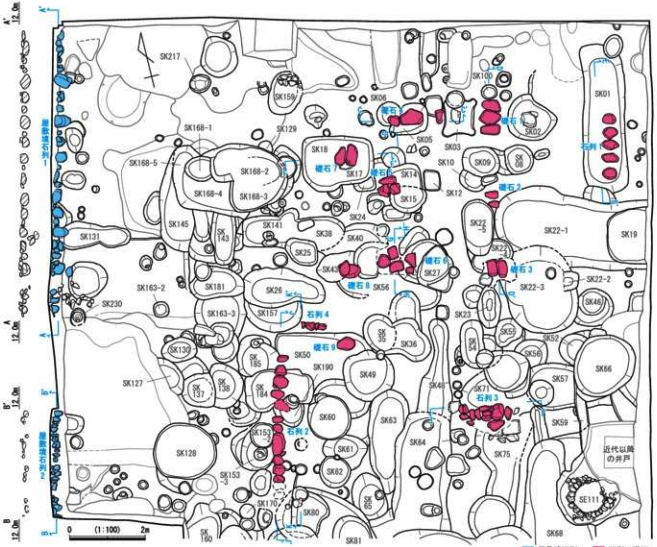
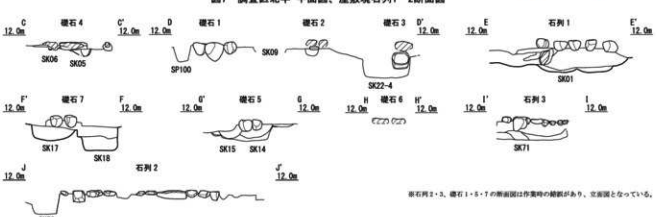


図7　調査区北半 平面図、屋敷境石列1・2断面図



※石列2・3、礎石1・5・7の断面図は作業時の傾斜があり、立面図となっている。

1. 砕石・盛土
2. 焼土（敷区焼土層）
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。
5. 10YR3/3 暗褐色土（柱穴）
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。（柱穴掘方）
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　貞観・鍛の混入多い。
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
10. 10YR3/3 暗褐色土（柱穴）
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。（柱穴掘方）
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。（SK50）
13. 10YR5/6 黄褐色土と 10YR4/3 にぶい黄褐色土の混合土（SK184）
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　炭化物含む。（SK184）
15. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　地山ブロック含む。（SK184）
16. 10YR4/3 にぶい黄褐色土　縁り強い。地山ブロック含む。
17. 10YR4/2 灰黄褐色土　礫含む。
18. 10YR7/8 黄橙色シルト質粘土（地山）

図8　石列・礎石 断面図・立面図

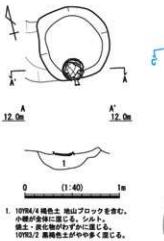


図9 SK08 平・断面図

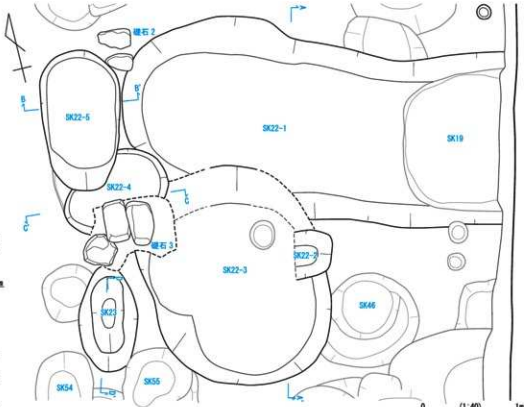


図10 SK22-1・SK22-2・SK22-3・SK22-4・SK22-5・SK23 平面図

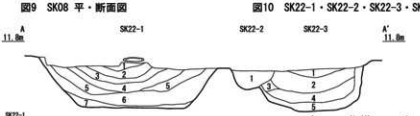


図11 SK22-1・SK22-2・SK22-3 断面図

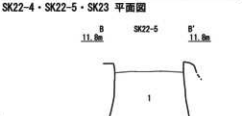


図13 SK22-5 断面図

図12 SK22-4 断面図

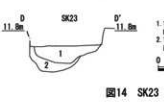


図14 SK23 断面図

図15 SK08 出土遺物

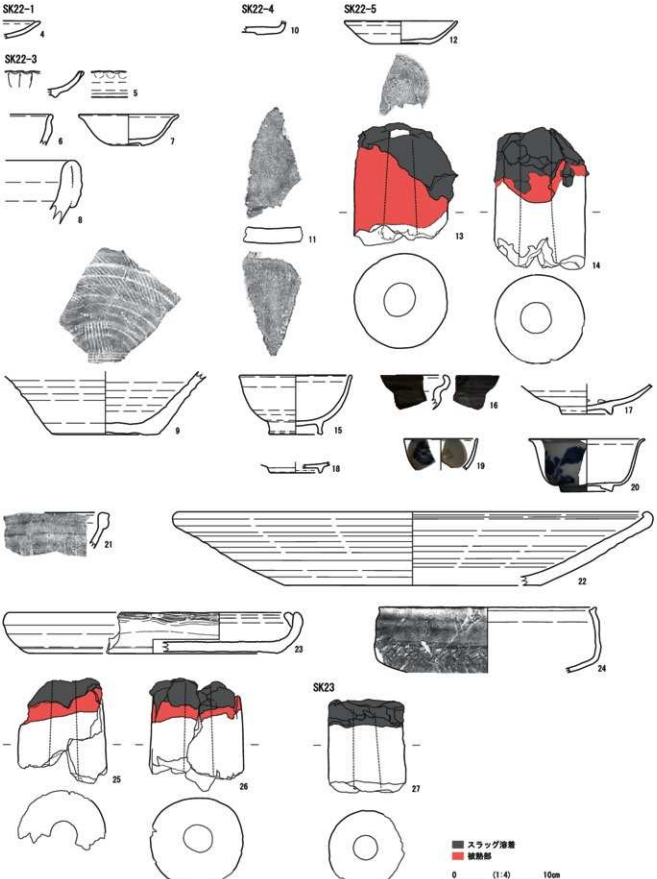


図16　SK22-1・SK22-3・SK22-4・SK22-5・SK23 出土遺物

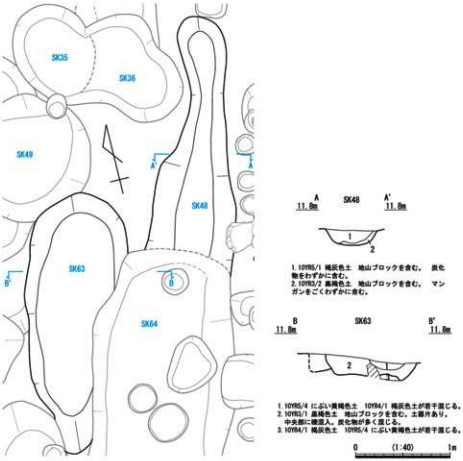


図17　SK48・SK63 平・断面図

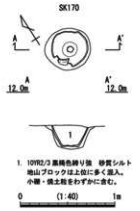


図18　SK170 平・断面図

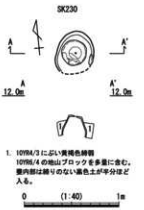


図19　SK230 平・断面図

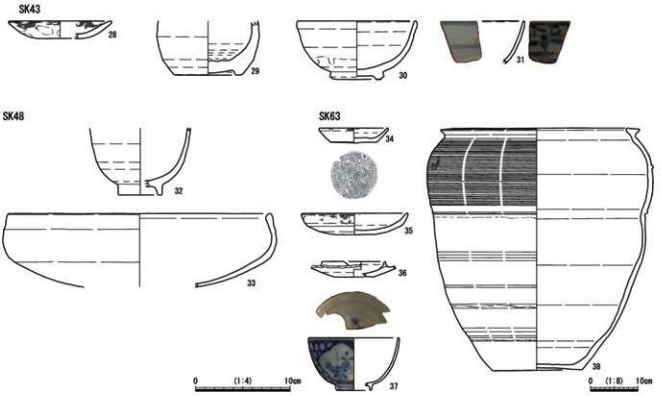


図20　SK43・SK48・SK63 出土遺物

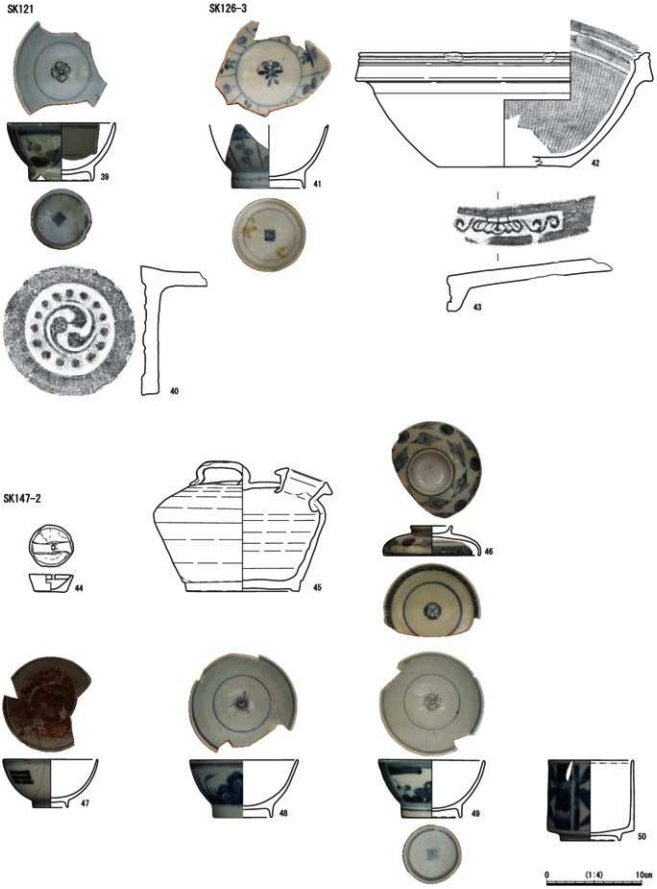


図21 SK121・SK126-3・SK147-2 (1) 出土遺物

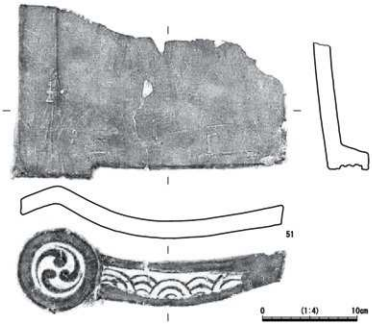


図22 SK147-2 (2) 出土遺物

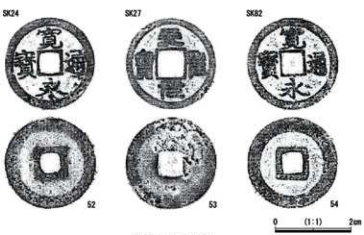


図23 出土銭貨

図24 SK17・SK18 出土土人形

イノシシの右下顎骨 (1)・橈骨 (2)・脛骨 (3・4)

図25 SK22-5 出土獣骨

西区全景（南から）

東区全景（南から）

南西区全景（北から）

東区北半全景（西から）

礎石 1 ～ 8（南から）

遺構写真（1）

写真図版 2

石列 2・SK170（南から）

SK170（南から）

石列 1 と SK01 断面（西から）

屋敷境石列 1（南から）

屋敷境石列 1 下層検出状況（南から）

SK01（南西から）

礎石 4 と SK05・SK06 断面（南から）

屋敷境石列 2（東から）

石列 3 と SK71 断面（北から）

SK230 検出状況（東から）

SK230 断面（南から）

石列 4（東から）

遺構写真（2）

SK22-1 断面（西から）

SK22-2・SK22-3 断面（西から）

SK22-4 断面（北から）

SK22-5 断面（南から）

SK08 遺物（1）出土状況（北から）

SK126-2・SK126-3 断面（南から）

SE111（南西から）

SK27 銭貨出土状況（東から）

SK147-2 断面（東から）

SE111 断面（南西から）

遺構写真（3）

報告書抄録

ふ り が な	ひめじじょうじょうかまちあと
書　　名	姫路城城下町跡
副 書 名	姫路城跡第444次発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第120集
編 著 者 名	南　憲和
編 集 機 関	姫路市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和4年（2022年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市呉服町（ひょうごけんひめじし ごふくまち）17番	28201	020169	34°49′50″	134°41′36″	2021.1.7～2021.3.18	312㎡	住宅建築

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
姫路城城下町跡	集落跡	近世	屋敷境石列、礎石建物井戸、土坑	土師器、陶磁器、瓦銭貨、土製品、獣骨	20200454

要　約	調査地は姫路城外曲輪の南部に位置する東呉服町（一時期は東紙屋町）と呼ばれた町人町にあたる。調査の結果、17世紀前半から中頃に鉄製品の生産または加工が行われていたとみられる土坑群を検出した。その後は、街路に面して礎石建物が構築され、屋敷地の南半（裏側）には繰り返し廃棄土坑が掘削される町屋として通有の土地利用形態が幕末まで継続していたと考えられる。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第120集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第444次発掘調査報告書―

令和4年（2022年）3月31日発行

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079）252-3950

発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0278　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2